異世界でお使い

かませ犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界でお使い

【Ｎコード】
Ｎ５１２３Ｍ

【作者名】
かませ犬

【あらすじ】
「お使いを頼まれてくれるかな？」中学校に入学して間もない小羽はある日、異世界へ渡る。そこで奇妙な喋るウサギにおつかいを頼まれる。
地球に帰るために、小羽は魔法や魔物が存在する世界で生きていく。気弱な少年の成長の話です。＊主人公最強物になる予定はありません。

第一話

笠井小羽は迷っていた。

梅雨明けの晴れの下、気難しげな顔をしながら下校している。
原因はさっき帰り道で見かけた小物のバッグを交番に届けるか否かだろう。
小羽は一度、わざわざ家と反対方向にある交番に足を運ぶのが、面倒であったため無視したが、すぐに罪悪感を責められ、１００ｍを進んだあたりでついに足を止めた。
失くした人が困っていると考えたら、小羽は面倒でもやはり交番に届けようと後ろを振り向いた。

そして一歩踏み出し彼は穴に落ちた。

――――

「うーん・・・・・・」

真っ暗な部屋の中で小羽は目を覚ました。
背中の感触からいすに座らされていることは分かったがなぜか体を動かせない。
腕や足が何かで固定されているのだろう。

（・・・・・・誘拐？）

小羽がそう考えていると急に視界が白くなった。

「っつ？！」

目に痛みを感じながらも前方の急に照らされた明かりを小羽は見る。

そこにはウサギが立っていた。

なぜこんなところにウサギが、と疑問を浮かべる小羽に

「ようこそ、アリスの子孫」

とウサギが若い青年の声で言った。

小羽は目の前のウサギが喋ったことを否定しようと、驚きながら慌てて周りを確認するが

「驚いているね」

と口を動かして喋るウサギを見て畏怖を感じた。

「おやおや、そんなに怯えなくても」

とウサギは苦笑したのだろう。しかし小羽にはその皺の寄った顔が怖くて仕方なかった。

「まあとりあえず、名前を教えてくれるかな？」

とウサギは固まっている小羽に向かってきた。小羽は怖くて口が動かせなかった。

そんな様子の小羽を見て、ウサギは仕方ないというような動きで、ポケットの中からアメを取り出し包みを剥がして

「ほら。食べなよ」

と小羽の口の中にアメを入れた。

最初は味なんて分からなかった小羽だが、徐々に口の中に広がっていくアメの甘みのおかげで、少し冷静になれた。

「・・・・・・笠井小羽」

かすれた声で呟くように小羽は言ったが、ウサギには聞こえたらしい。

「そうか、小羽君か！」

と嬉しそうに言う。
そんなウサギの様子を見てかなり安心した小羽は周りを確認した。
腕は椅子の手摺のところで頑丈そうな金属で固定されている、足も同じだろう。
逃げることはできないと考え、小羽は目の前のウサギに目を移す。
よく見るとウサギは彼の知っているウサギと比べてかなり大きかった。
中学男子の中でも小柄な小羽の腰くらいはあるほどの身長を、しっかりと
二本の足で支えて立っていた。黒い短パンに白いシャツを窮屈そうに着ている。
喋ることといいなんとも奇妙なウサギだなと小羽が考えていると

「そろそろ落ち着いたかな？」

とウサギが尋ねてきた。
自分が落ち着くまで待っていてくれたのかと思うと、欠片ほどあった恐怖も消えた。

「うん、もう大丈夫」
「それは良かった、やっぱりお菓子は偉大だよね」

ウサギはポケットからアメを取り出し、ウサギの手で起用に包みを剥がし口に入れた。
喉につまらないかなと小羽は思いながら尋ねる。

「ここは何処なの？」
「ん、ちょっとした休憩所のようなところだよ」
「どうして僕はここにいるの？」

と尋ねるとウサギは嬉しそうに言う。

「アリスの子孫だからだよ！」

第一話（後書き）

初めて小説を書き、投稿しました。ファンタジー物です。
至らぬ点が多くありますが、暖かい目で見てもらえれば嬉しいです。

第二話

小羽は眉を寄せて聞く。

「アリスの子孫ってどういうこと？」
「そのままだよ、君はあの知的で好奇心が旺盛で、そして強い冒険心のあるアリスの
子孫なんだ」
「アリスって不思議の国の？」
「それは物語だろ、まあ半分正解なんだけどね」

と苦笑しつつウサギは答えた。

「どういうこと？」
「ご主人がその物語をいたく気に入ってね、自分の名前をアリスにして冒険していたんだよ」
「そうなんだ、でも子孫って？」
「それがまた面倒なことなんだよ」

とため息をつきながらウサギは言った。

「うーん、まあ説明するけど、ご主人といつものように冒険していたんだけど、急に『眠るから、適当な時になったら起こしにきて』ってどっかに行っちゃってね。慌てて追いかけたんだけど、途中で

見失っちゃったんだ」
「それは大変だね」
「うん、仕方ないから探して起こしに行きたいんだけど、広いから誰かに手伝ってもらうことにしたんだ」
「その誰かに僕が選ばれたの？」
「その通り！　眠っているご主人を起こしに行ってもらいたいんだ」
「え、でも子孫って？」
「いつまでもぐっすり眠っている親を起こすのは子供の役目だろ」
「いやそんなことないと思うけど」

ハハハと笑いながらウサギはポケットの中からから何かをとる。

「さあ、早速準備していこうか！」
「僕行くなんていってないんだけど！」
「とりあえず、選んでくれる？」
「無視しないでよ！」

語気を荒くした小羽の目の前に、何十枚というカードが綺麗な放物線で広げられる。
彼は驚いて言う。

「器用だね・・・・・・」
「そうでしょ」

と嬉しそうにウサギが言った。

「さあ、どれがいいかな？　一枚選んでみよう」
「動けないんだけど・・・・・・」
「そうだったね、じゃあ口で言ってみよう」

ハハハと笑いながら楽しそうにウサギが言った。
小羽はムッとしながら言う。

「右から１２番目」
「１２番目だね・・・・・・、ッアハハ君は面白いものを選ぶね！」
「別に、自分の出席番号言っただけだよ・・・・・・」
「まあ、そう不機嫌にならないでよ。おめでとう、君の能力はこれだよ」

とウサギはそう言い小羽の前に一枚のカードを出す。
そこには気味の悪い化け物が描かれていた。
ほとんど黒と茶色、そして血のように赤い色で、人型のような物が描かれていた。

（ヒッ――――――！）

小羽は今まで生きてきた中で経験したことのない恐怖を絵に抱いた。
ずっと見ていると、引き込まれそうな感じに怯えつつウサギに聞

く。

「これ何っ？！　ていうか能力って？」
「今から君が行くところはこの絵の化け物みたいなものがたくさんいるからね、用心しないと」
「え・・・・・・？」

と小羽は困惑した。

「アハハ、とても面白い顔しているよ！」
「どこに連れて行くつもりなのだよ！」
「とてもファンタジーなところだよ」
「具体的にいってよ！」

と自分の質問を全て無視された小羽が怒りながら言った。

「大丈夫、君は異世界に行って眠っている親を起こしてくる。簡単でしょ？」

ウサギは突拍子もないことを笑顔で言った。

「異世界・・・・・・？」
「そう！　じゃあお使いは任せたよ！　がんばって」

「・・・・・・っちょっとまってよ！　どういうこと！」
「それではアリスの子孫らの旅に加護がありますように！」

そして小羽は穴に落ちた。

第二話（後書き）

続きは基本的に書き終わったら、編集してすぐに投稿していくつもりです。
最初は勢いで書いているけど、後半不定期にならないかが今の心配。
がんばります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5123m/

異世界でお使い

2010年10月8日22時53分発行